

「予型と対型」、「影と実体」とは何か。なぜ存在するのか。

私が育った家には、敷地内に家と同じくらいの大きさの作業場がありました。その作業場には、父の仕事の機械が置かれていました。巨大な帯鋸、大きな丸鋸、平削り盤、電動研磨機、3メートルの材木用旋盤、ルーター、それ以外にも、たくさんの小型の電動機械や、手動の工具がありました。父は、この作業場にある機械を使って「型作り」の仕事をしていたのですが、その技術は、ニューキャッスルの大きな鉄工所で見習いをしていた時に学んだものでした。父が、入り組んだ図面をもとに、材木で複雑な型を作るのを私は見て育ちました。その型は、鋳物工場に送られ、そこで特殊を砂を用いて、鋳型が作られました。鋳型に溶解した金属を注ぎ、固まったら、砂型から取り出して、仕上げをすれば完成です。父は、動物の餌用の桶から、エンジン部品、プロペラの刃まで、ありとあらゆる型を作りました。

今朝、皆さんになぜこんな話をしているかと言うと、ヘブル7章を理解するために、次の二つの言葉、あるいはその意味に関わる重要な概念を考えることが役立つからです。一つ目の言葉は、「予型」、いわゆる型です。そして、もう一つの言葉は「対型」、すなわち完成品、型のたどり着く先です。この話をする時、妻は「レシピのようなもの？あるいは、裁縫の型紙とか。ドレスとか、ケーキみたいに、何度も試された作り方を使って、最終的に自分の望み通りの物を作り上げるみたいな感じかしら？」と言いました。

聖書を読むと、「標識」と「目的地」、「影」と「影をつくる実体」について考えさせられます。例えば、使徒パウロはコロサイ2:17で、あるユダヤ教の規則の遵守に触れています。

「これらは、来るべきものの影であって、本体はキリストにあります。」

旧約には、神学者が「予型」と呼ぶものが沢山あります。それらは、新約聖書において「対型」で成就される型、しるし、影です。型から、目的の完成品が作られます。また、レシピを使って、ケーキが作られます。では、より優れた型やレシピが与えられたらどうでしょうか。皆さんはどうしますか。より優れているという証拠があっても、そうと信じることを拒んで、古いものに固執しますか。

旧約の予型の目的は、完成品としての対型をあらかじめ示すことです。より優れたものがあるとわかっているながら古い型を使い続けることを選択するならば、それはかなり不合理でばかっています。しかし、それこそがヘブル人がし始めていたことなのです。キリストにある新しい契約を与えられたのに、時代遅れの旧約の型を使い続けることを望んでいました。まさにそれが、諸悪の根源でした。旧約のやり方に戻りたいという誘惑に駆られ、彼らはイエス様にある新しい、はるかに優れたやり方を捨てようとしていました。

いわゆるユダヤ教の大祭司と、彼らがエルサレムの神殿で罪のためのいけにえを捧げていたことは、もはや有効ではなくなりました。それは、イエス様が大祭司として、十字架で最高のいけにえを捧げてくださったからです。彼らは、戻りたがっていた旧約のしるし/予型/影が、キリストにある実体/対型よりも劣っていることを知らなければなりません。

ですから、ヘブル人への手紙の著者は、ユダヤ人たちの視点から、メルキゼデクというしるし/予型/影が、アブラハムやレビというしるし/予型/影よりもどれほど優れているかを証明しています。ユダヤ主義の彼らは、キリストよりもアブラハムやレビを優先するという危険な状態にありました。

著者は、メルキゼデクの優位性を証明する中で、対型であるイエス様の、究極の大祭司としての無限の優位性を示しています。

ヘブル人のクリスチャンのようにユダヤ教の予型や影によって確信を得たいとは思いませんが、21世紀のユダヤ人ではない私たちも、イエス・キリスト以外の何かに、自分自身のアイデンティティーの意味、受容、確信を見つけない誘惑に駆られます。ある罪のパターンにはまってしまう理由の一つは、大切な人や物という一時的な救済者の劣った影や型に満足を求めるからです。ポール・トリップ師が「いくら良い物でも、それがあなたの心を支配するようになったら、それは悪い物です。」と言っている通りです。

ヘブル人への手紙の著者は、メルキゼデクの予型が他よりもすぐれていることを証明しています。それは、イエス様の究極の優位性の確信を与えます。そして、それにより、私たちがイエス様を崇め、畏れるようになるためです。メルキゼデクに倣って、永遠の大祭司としてイエス様が幕の内側に入られたことを記した後で、著者は次のように書いています。

名前と肩書の優位性(1-2節)

「このメルキゼデクはサレムの王で、いと高き神の祭司でしたが、アブラハムが王たちを打ち破って帰るのを迎えて祝福しました。²アブラハムは彼に、すべての物の十分の一を分け与えました。彼の名は訳すと、まず『義の王』、次に『サレムの王』、すなわち『平和の王』です。」

著者は詩篇 110 篇を引用した後、5章 10 節でメルキゼデクの例に倣って大祭司について説き始めました。そして、メルキゼデクの話は一旦保留し、人々に霊的怠惰の危険や、そこから来る霊的幼稚性について警告しました。そして今、ヘブル人や私たちに霊的に成熟した者の食事を取りなさいと言っていた話を再開しています。ここでは、メルキゼデクがアブラハムやそのひ孫レビよりも優れていることを証明する、より詳細な議論が展開されています。レビはイスラエルの 12 人の息子の一人で、イスラエル国家の祭司の血筋となりました。

では、なぜ著者はこの話をしているのでしょうか。冒頭で申し上げた通りですが、旧約の歴史や習慣のしるし/予型/影がイエス・キリストの対型/現実/実態よりも優れていると信じる不合理な状態からヘブル人クリスチャンの目を覚まさせるためでした。

著者は非常に丁寧に、彼らに合わせ、彼ら自身の旧約の内容を用いて、メルキゼデクが彼らの頼りとするアブラハムやレビやレビ族の祭司たちよりも本当に優れていることを示し、また、メルキゼデクに倣ったお方は単にそれよりも優れているだけでなく、一番優れたお方であることを証明しています。

著者は、まず、メルキゼデクが名前と肩書においてアブラハムよりも優れていることから始めています。2 節後半にあるように、メルキゼデクの名は、ヘブル語でメルキ=王、ゼデク=義です。サレムはヘブル語のシャローム=平和と関係しています。また、約束の地の町でもありました。500 年後レビの兄弟ユダの子孫が征服する場所です。サレムの町はエル・サレム「平和の礎」として知られるようになります。そして、アブラハムとメルキゼデクの千年後、ユダの子孫の一人のダビデ王が、イスラエルの敵エブス人からこの町を取り戻します。(2 サムエル 5 章) その時から、この町は「ダビデの町—平和の町」と呼ばれました。その中

心にあるのがシナイ山で、そこにダビデの息子ソロモンが神殿を建てました。神様との和解という希望が、ある期間、その神殿に宿りました。

メルキゼデクの肩書は「いと高き神の祭司」でした。また、驚くべきことに、その500年以上前に、モーセのもとに律法が与えられ、その兄弟アロンのもとに祭司職がたてられました。モーセもアロンも、レビから4代目の子孫です。このメルキゼデクは聖書の歴史の中で、ユダヤ人の父祖アブラハムの時代(紀元前二千年)に登場します。しかし興味深いことに、次のように記されています。

過去と未来による優位性(3節)

3節前半 「父もなく、母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく…」

親がなく、初めも終わりもないなんて、神様以外にあり得るでしょうか。このことから、多くの聖書の注解者の多くは、メルキゼデクは具現前のキリストだと考えます。しかし、この節の後半に、そうではなく、キリストに似たしるしや型だと示唆するヒントがあります。

3節後半 「神の子に似た者とされて、いつまでも祭司としてとどまっているのです。」

つまり、著者は、神様の御子はメルキゼデクのようにだとも、同等だとも言っていません。むしろ、メルキゼデクが神様の御子のようにだと言っているのです。要するに、メルキゼデクがしるしであり、私たちに実体を示す予型であること、そして、その対型が神様の御子であることを強調しています。「わたしは父に似ている」とは言いますが、「父が私に似ている」とは言いません。それは父が私よりも先にいたからです。同様に、メルキゼデクはイエス様に似た者です。それは、イエス様がメルキゼデクよりも前に存在した神様の御子だからです。

創世記の出来事をそのまま読むと、メルキゼデクは偉大な人であったにすぎません。そして、聖書によると、彼の家系も死の詳細も不明だったということです。サレムがエルサレムとなったソロモンの治世の神殿では、メルキゼデクの名を再び聞くことはありません。創世記の後、メルキゼデクの名が次に出て来るのはダビデ王による詩篇 110 篇です。生きている人物ではなく、予型としてです。そして、その対型はダビデの主です。そのあと、メルキゼデクの名はヘブル人への手紙まで出てきません。これらをまとめると、旧約のメルキゼデクの説明を読むと、メルキゼデクから始まった司祭職は神様のご計画により、決して終わらないと言わなければならないと著者は言っています。

偉大な人々との比較による優位性

・ 十分の一に関するメルキゼデクと、アブラハム、レビの比較(4-6節)

「さて、その人がどんなに偉大であったかを考えてみなさい。族長であるアブラハムでさえ、彼に一番良い戦利品の十分の一を与えました。⁵レビの子らの中で祭司職を受ける者たちは、同じアブラハムの子孫であるのに、民から、すなわち自分の兄弟たちから、十分の一を徴収するように、律法で命じられています。」

アブラハムは偉大な人でした。創世記 23:6 で、ヒッタイト人たち(カナンの地を占拠していた七民族の一つ)は、アブラハムを「私たちの間にある神のつかさ」と呼んでいます。また、三ヶ所で、アブラハムは神様の友と呼ばれています。(2 歴代誌 20:7、イザヤ 41:8、ヤコブ 2:23)

しかし、アブラハムがメルキゼデクに戦利品の十分の一を与えた、すなわち十分の一を奉獻したということは、メルキゼデクの方がアブラハムよりも立場が上です。そして、レビからの司祭職の家系の者よりも上です。レビはアブラハムのひ孫ですが、律法により十分の一を受け取っていました。それは、アブラハムからではなく、同じ立場の兄弟たちからです。アブラハムの 11 人のひ孫の子孫からです。のちにイスラエルの 12 部族となった、イスラエルの子からです。言い換えれば、レビ族の祭司たちは、律法にのっとり、自分たちの兄弟たちから十分の一を受け取っていました。その兄弟たちも父祖アブラハムほど優れてはいませんでした。

著者は、6 節前半で「ところが、レビの子らの系図につながっていない者が、アブラハムから十分の一を受け取り…」と記し、メルキゼデクがアブラハムやレビよりも優れているという議論を終えています。聖書に一番初めに登場する十分の一の捧げ物の受け取り手は、メルキゼデクでした。彼は、捧げる者より優れていました。捧げる者の子孫で司祭職を担うレビ族は、司祭ではない子孫たち(イスラエル人)から十分の一を受け取っていたのですが、メルキゼデクはレビ族の司祭たちよりも優れていました。

さらに、メルキゼデクは…

・メルキゼデクはアブラハムを祝福する者(6 節後半-7 節)

「…約束を受けたアブラハムを祝福しました。『言うまでもなく、より劣った者が、よりすぐれた者から祝福を受けるものです。』

創世記 12 章で神様は、アブラハムに素晴らしい約束を与えて、祝福なさいました。その 2 章後でメルキゼデクが登場し、アブラハムから十分の一を受け取る前に、彼を祝福しました。そうすることで、祝福を受けるアブラハムより、祝福する自分の立場は上だと示したのです。メルキゼデクの優位性の証明を結論づけるために、著者は十分の一に話を戻します。それは、死ぬ者に対する永遠なる者の型を強調するためです。

・メルキゼデク—死ぬ者に対する永遠なる者の型(8-10 節)

8 節「十分の一を受けているのは、一方では、死ぬべき人たちですが、他方では、生きていと証しされている人です。」

F. F. ブルース師「メルキゼデクが死んで祭司職を終えたとはどこにも記録されていません。一方、レビ族の祭司たちについては、死んで、後継者にその位と責任が引き継がれたことが何世代もわたって記録されています。イスラエルの律法で定められている十分の一は、死ぬ者に払われました。アブラハムがメルキゼデクに与えた十分の一は、記録によれば「いのちの終わり」のない人に払われました。この限りある、「文字通り」の意味の中で真実なのは、神様のご臨在の中で大祭司として人々に仕えた人の絶体的真実です。メルキゼデクは、生きていた人として以外の記述が無いという意味で、生きていと証しされています。キリストは、すべての人のために一度死に、死からよみがえり、永遠に生きておられるから、生きているお方と言えます。」

メルキゼデクが決して死ななかつた人ということではなく、彼は永遠の対型に対する予型であるために、聖書に彼が死んだという記録がないというだけです。

レビが死ぬ者の予型であるのに対し、メルキゼデクは永遠なる者の予型です。その素晴らしさを強調するために、著者は、終わりに DNA の話を持ち出します。

『言うならば、十分の一を受け取るレビでさえ、アブラハムを通して十分の一を納めたのでした。』¹⁰ というのは、メルキゼデクがアブラハムを出迎えたとき、レビはまだ父の腰の中にいたからです。』

現代的な見方ですが、レビはアブラハムのひ孫ですから、アブラハムの DNA の八分の一を持っていました。別の見方をすれば、祖先は、その子孫全てを、内に持っていることになります。アブラハムがいなければ、彼の子孫は誰も存在しえなかつたのです。その観点から、アブラハムはレビが生まれる 3 世代前に、レビを具現化しました。著者は、これが、変わっているけれども、論理的で確かなことだと認めています。十分の一を受け取るレビの子の祭司たちは、その父祖アブラハムを通して、メルキゼデクに十分の一を与えたと言えるのです。つまり、レビ人の祭司たちの型は、ヘブル人のクリスチャンが実体だと間違っていたのですが、メルキゼデクの型よりも劣っていたのです。

メルキゼデクが、偉大な父祖アブラハムよりも、その子孫のレビとその家族よりも、優れた影/予型/型だという圧倒的な証拠を私たちは目にしています。それよりも優れたお方イエス・キリストの登場までそれは続きます。

イエス様はこう言われました。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」(ヨハネ 2:19)

イエス・キリストは、影であるメルキゼデクが予示した実体です。

イエス・キリストは、予型であるメルキゼデクが予示した対型です。

イエス・キリストは、メルキゼデクの型からできた完全な祭司です。

影の向こうにある実体を見る

1516 年に書かれたイタリアの叙事詩の中に、こんな表現があります。「王の息子が生まれたとき、その子があまりにハンサムだったから、『創造』の型が壊された。」そこから「型破り」という表現が今も使われます。「誰かを造った時に、その型が壊された」というのは、その人が独特で、類を見ないという意味です。

ヘブル人への手紙の著者は、メルキゼデクの優位性を証明しました。それは、私たちの目を、メルキゼデクという型が予示したお方に向けさせるためでした。キリストの型は壊されました。他に類を見ないお方です。キリストは究極の義の王、平和の君、神様の御子、永遠なる大祭司です。

主が望んでおられるのは、私たち一人一人の心が深く動かされ、主の素晴らしさに触れ、主を畏れるようになることです。そして、良く見えても、私たちの心を支配する悪い物に変わってしまう物にしがみつくのではなく、最高のお方に立ち返るようになります。そのお方は、永遠なる真実、御子、私たちの救い主、王、大祭司、私たちの主イエス様です。